

チェンマイ大学での貢献 (97)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では「バーチャル・ファーム・アカデミー (Virtual Farm Academy)」について記す。最近ではあるが、3、4年前に持続可能な農業：食料とエネルギー(SAFE: Sustainable Agriculture: Food & Energy) という大学間コンソーシアム (Consortium) に加わり、いろいろなイベントに参加してきたことを既述した。アジアの多くの大学がメンバーとして加入、参加し、活動は極めて活発である。あらためてこの組織について紹介する必要は無いが、簡単な既述にとどめ置く。インドネシアのアンダラス大学 (Andalas University) のノビザ教授 (Prof. Npvizar) とヘルミ教授 (Prof. Helmi) が代表世話係で運営されている組織で、文字通り持続可能な農業の発展という観点から、主にアジアの大学間交流を通じて推進しようという事業である。筆者がノビザ教授と知り会ったのはベトナムのホーチミン市にあるノンラン大学での学術イベントで、当時は互いに見知らぬ間であったが、翌年筆者にコンタクト(Contact) があり、それ以来のつきあいである。チェンマイ大学はこの事業に加わっていなかったが、同じチェンマイに有るラジャパット大学 (Chiang Mai Rajabhat University)、マエジョ大学 (Maejo University) は既に加わっていた。口幅ったい言い方であるが、筆者とノビザ教授との親交からチェンマイ大学もそのメンバーの一員として参加し、2019年にはホストとしてプーケット (Phuket) でワークショップ (Workshop) を企画開催した。タイ南部のソククラ大学 (Prince of Songkla University)、ラジャパット大学の分校の協力も得てイベントは無事に済んだ。この事に限らず、インドネシアでのサマー・スクール (Summer school) やワークショップ、シンポジウム(Symposium) にはかれこれ4回ほど、またフィリピンでの同種の企画にも2、3度参加させて頂く機会をえた。時にはチェンマイ大学の学生2名をつれてサマー・スクール (Summer school) に参加した。予算は潤沢にある(?) ようで、筆者に限っては殆どが招待という扱いを受けてきた。極めて有り難いことでもある。また上記2人の教授昇任 (昇格) の祝賀会にもゲスト (Guest) としての招待を受けた。大学を挙げての祝賀行事が厳かに執り行われた。2人の教授が記念講演をし、祝賀パーティに移り、翌日はミニ・シンポジウム (Mini symposium) と盛り沢山であった。そうした活発な活動が続ける組織であるが、その一環として提案されたのがバーチャル・ファーム・アカデミー (Virtual Farm Academy) である。事業の内容については明確でない部分もあるが、筆者なりの解釈でいくらかを示すと次のようになる。昨年末(2019) から休息にパンデミックに発展したコロナ・ウイルス (Corona virus) は半年以上も移動の自由、接触の自由を絶たれ、ひたすら自宅待機や、限られた場所での勤務に制限され、不自由さを感じつつも、敢えてその状態での生活を強いられてきた。かといって何時までも活動が抑制、制限されると国の経済は低迷し、日常生活にも支障を来す。学術的に如何に高

等なレベルの研究であっても、何事が起きても対処できる完璧な危機管理 (Risk management) が伴わないと意味はない。2020年7月は、国により差はあるが一部の国では入出国を緩和する動きもあったが、益々感染者や死亡者が増えつつある国もある。コロナ・ウイルス禍の第2波、第3波の襲来もあるのではないかとの懸念もあり、油断はできない毎日が続いている。死ぬ必要が無い多くの人が、運悪く死に至る不幸を誰が予想したであろうか。まだまだ状況の変化を予測することは難しい。こうした厳しい生活環境の中で、急速に需要が高まった通信情報機器が、かろうじて人間関係を保持することに貢献しているように見える。特に将来の国家を背負って立つ高度な人材育成の役割を担う教育機関では、長期の休校、休学が続き、講義や授業の殆どがオンライン(Online)化した。あらゆる通商産業機関もできるだけ事務所などの労働空間を縮小し、無駄な空間を有効利用することで、在宅勤務システムへの大幅な改築に乗り出しているとも言われる。こうしたコロナ・ウイルス禍を予測したわけではないが、偶然にも、思いも掛けぬ危機対応としても、また皮肉にもバーチャル・ファーム・アカデミー (Virtual Farm Academy) が効果的な可能性を示す一例として浮上してきたことは幸であり、時を得たタイムリーな企画である。コロナ禍をやり過ごすだけの期間限定では無く、常日頃から通常的に情報を配信・共有し、いざという時に間に合うような対応として、予め教材として準備した情報を配信しておく利便性もある。バーチャルだから、物理的に移動して、直接顔を合わせてコミュニケーションをすると言うのでは無く、むしろそうした行動は極力少なくして、可能なことの殆どはオンライでと言う形式になる。従来は教える側が、あるいは教わる側が、あるいは双方が出会う共通の場所で、直接コミュニケーションする部分を極力少なく、その代わりに可能な事の多くはオンラインでと言う形に変えると言う事である。利点も有るが欠点もある。利点としては、1) 直接顔を合わせるための共通の場所に出向く交通費、宿泊費、その他関連経費が節約出来る、2) ウイルスの感染などが防げる、3) 聴講者の人数を制限する必要がなく、希望があれば人数枠を大幅に増やすことも可能、4) 講義資料と授業内容が記録資料に残り、何度でも利用可能、5) 授業のやり方、内容が多くの関係者の目に触れるので、授業のやり方や資料の更新 (Update) など、改善に向けた問題点が明らかになる、6) 言うまでもなく、現場において十分にその機能や動作、利用法を十分に説明できない巨大な装置や機器を動画映像で示すことができる。このことは直接顔を合わせての集団講義でも可能であるが、より効果をあげる方法の模索が重要である、7) 講師自身が授業や、資料内容、語学力について改善を迫られる。一方、欠点と想われる部分は次のようである。1) 国際的な事業では各国毎の時差を考慮する必要がある、2) 通信情報機器の機能に対する信頼性を高め、突然の故障、不具合、停電などへの完璧なフォローアップ体制が必要。したがって故障時、不具合時の対応として、さらに予備の機器 (Spare equipment / Device) をいつでも利用できる様に、準備待機させておく必要がある。さもなければ、リアルタイム、ピンポイントでの情報通信 (Real time & Pin point communication) の意味がなくなる。3) 講師にあっては、英語あるいは使用言語でのコミュニケーション能力、特に質疑

応答における十分な説明、議論能力の保持が必要。と言うわけでおおよその予測は上記の様になるが、如何に効果を挙げるかと言う点で多くの努力、対応が必要である。もちろん講師自身の授業内容改善への工夫、それに向けた努力、更新が重要な事は言うまでもない。というよりはこの事が最も重要で必要なことである。リモート授業 (Remote learning)、イー・ラーニング (e-learning)、オンライン授業 (Online lecture)、バーチャル・ミーティング (Virtual meeting) などはほぼ同義語として扱える。いずれも会議や討議に参加するメンバーが物理的に共通の指定された場所に集まって直接顔を合わせて意見を言い合うというのではなく、電子機器を媒体として間接的にメンバーの顔を見ながら議論を進める形式の会議である。実際には、そのアプリケーション・ソフト (Application software) としてはスカイプ (Skype) やライン (Line)、ズーム (Zoom)、 Teams、グーグル・クラスルーム (Google classroom) などいくつかが用意されている。会議参加者の数が増せば、誰が誰かを確認することも若干わかりにくくなる。音声や映像の不具合で相手の意見を聞き取れなかったり、理解しにくかったりすることが無いよう、常にそうした機器の取り扱いになれた技能員あるいは技官 (Technician / Expert) を用意し、会議が途中で途切れることが無いよう対応できる準備が整っている必要がある。また上記した様に参加者が国際的になると時差も考慮しなければならない。こうした状況の中で如何に講義の内容を充実させ、高いレベルと良質の内容あるものにするかを追求する必要がある。もちろん聴講する側が魅力と関心を寄せる授業の方法や冗談 (Joke) や眠気を起こさない付加的な話題 (Topic) も入れた内容にする努力が必要となる。と言うのも、方法論的にはおなじような機械や機器を用いるのであるから、後は講義の内容とその質での競争に打ち勝つものを附加する必要がある。本報で紹介のバーチャル・ファーム・アカデミーがどの程度の効果をもたらすかは、まだ始まったばかりで何とも言えないが、類似のプログラムは他にも多々見られる。例えば、バーチャル・イリゲーション・アカデミー (Virtual Irrigation Academy) やアーバン・ファーム・アカデミー (Urban Farm Academy) などがそれである。より近い類似のプログラムとしてはバーチャル・ファーム・ツアー (Virtual Farm Tour) というのもある。筆者が提唱したグローバル・テトラレンマ (Global tetralemma) における食料・エネルギー・環境問題を農業を通じて解決するもので、換言すれば農業の果たす役割の重要性、必要性、をあらためて認識し、地球規模の 4 課題を如何に調和の取れた形で解決するかと言う課題の一環としてのプログラムで、単に現地での視察、見学というのでは無く、参加し、実際に実作業を体験する内容も含んでいる。見聞きして得た知識の確認という意味を持つ。本来は講義をする者と受講者が一堂に会して、教材を共有し意見交換、質疑応答を通して学ぶ方式が一般的であるが、コロナ禍はそうした状況を一切許さない環境での授業実施、受講という形を、強制的に強いられた制約条件下での対応と言う事になるから、講義内容の高度化、高品質富裕化、スムーズ (Smooth) なコミュニケーション技量 (Communication technique)、と言った点がプログラムの評価 (Evaluation) を左右する。あるいはこうした講義への履修参加を正式な研修員としての受講資格の評価に用いる

のも一案である。CV (Curriculum Vitae) や推薦状 (Recommendation letter) などのいわゆるドキュメント・ベース (Document based materials) での選考に加えこのプログラムへの参加とその結果に対する評価に基づき、証書 (Certificate) を発行授与した者を集団研修参加資格の指標とするのである。

筆者は国際会議やシンポジウム、ワークショップ (Symposium & Workshop) が単に学術研究論文発表の場のみで無く国際化の推進に意味があることも忘れては成らないと協調している。育った環境や文化、伝統、言語などが異なる国からの参加者がイベントの期間だけでも同じ時間を共有(Sharing)し、異なる相手国文化や伝統を尊重しつつも、国際的社会常識 (International common sense)、礼儀作法 (Etiquette & Manner) を理解すると言う、もう一つの面を忘れては成らない。他人を思いやり、共通の合意事項 (Agreement) を遵守し、協調を基本に共通の理解と合意の基で競争する。結果については相互理解、相互尊重の精神 (Spirit of mutual understanding & respect) がなければ人類の発展は望めない。感動 (Impressive and passionate emotion) はその後の人生の生き方、方向をも変える衝撃的な機会をも提供する。既に社会に一般的に普及している通信教育は、時間的、経済的、各種不利な制約条件を超えて一定の資格を認定する者であるが。このプログラムを国際的に広げ、大きな成果を見るには未だ時間が必要であるが、独創的 (Originality) という点から、講義内容を順序を追って整理し、一つの研修プログラムにしてまとめ、話題別に用意した講師による講義をある期間に亘り、定期的に配信し、評価して修了証明書 (Certificate issue of program completion) を発行し、コロナ禍のような緊急非常事態が収まって物理的に移動が可能となり、現地での研修が可能となった時に、あるレベル以上の者を正式なプログラム参加有資格者 (Qualified participants) として選考 (Screening / selection)、登録 (Registration) する。以下の写真はヴァーチャル・ファーム・アカデミープログラム立ち上げを知らせるアナウンスメントである。如何なる展開を示すか、まずは実施し、徐々に修正、追加、改善、提案のプロセスを繰り返すにより充実した形に持って行く時間を今少し必要とすると思われる。プログラム立ち上げ責任者の熱意としっかりとした基本的フィロゾフィー理解の共有が事業の推進とその速度を左右する。

最後の最後には現地、現場、現物を事業参加者が直接訪れて、見て聞いて確認して理解する必要性は未だに残るからコロナ禍開けと同時に迅速な行動対応が出来る準備を今のうちに為しておく必要がある。

オンラインセミナー、授業に於ける問題点の一つは、参加しているかどうかの確認が容易でないことである。かならず点呼を取って出欠を確認することは一見容易に思えるが、参加している不利をすることも可能である。すなわちスイッチ・オンしておけば双方向に常に画像が配信されていない限り、参加者はどの様な服装であろうと、あるいは極端言うとその場に居なくても参加したことになる。また宿題や課題を課しても知人からコピーをさせて貰うことで対応する事も可能である。そうなると何処まで本当に受講者が理解して居るかの判定が紛らわしくなる。筆者はこうした経験をこれまでの講義で経験してきた。し

かしそれを確証することはできず、今でも課題である。。

LAUNCHING CEREMONY OF SAFE VIRTUAL FARM ACADEMY

Hosted by: Central Bicol State University of Agriculture(CBSUA), Philippines

July 6, 2020. Time :9.30 AM (Philippines Time),
8.30 AM (Jakarta Time)

Time Schedule:

Minutes 0-3 Moderator to acknowledge the pax and Introduce the event
Minutes 3-6 Brief Background of VFA (Dr. Hanilyn Hidalgo, CBSUA-Philippines)
Minutes 6-11 Message from CBSUA President (Dr. Alberto N Naperi)
Minutes 11-16 Message from Commission on Higher Education of the Philippines (Atty Lily Freida Macabangun-Milla)
Minutes 16-21 Message of Support from Indonesian Education and Cultural Attache in the Philippines (Dr. Lili Nurlaili)
Minutes 21-26 Message from the President Maejo University, Thailand (Assoc.Prof. Dr. Weerapon Thongma)
Minutes 26-31 Message from SAFE-Network (Prof. Dr. Novizar Nazir)
Minutes 31-34 Farm Tourism Module primer
Minutes 34-36 Announcement of Website
Minutes 36-38 Acknowledgement

The link for joining the Google meet:

<https://meet.google.com/ujh-vnwt-kgp>

Virtual Farm Academy Website: <https://safe-vfa.org/>

Link for registration:

https://bit.ly/Safe_virtual_farm_academy_launching

Link for Youtube: <https://youtu.be/Vrel19isHA4>

Online launching of **FARM TOURISM**
PILOT MODULE
VIRTUAL FARM ACADEMY
Join with Google Meet
<https://meet.google.com/ujh-vnwt-kgp>
July 6, 2020
9:30 am (Manila time)

SAFE Network の推進プログラムである Virtual Farm Academy の立ち上げ記念式典を知らせるアナウンスメント。